

「山間地域の被災と支援について」

**関西学院大学災害復興制度研究所・研究員
准教授 松田曜子**

本日発表する内容のタイトルに「山間地域」と入れました。私が訪れた地域は、ネパールでは「山」ではなくて「丘」と呼ばれる地域です。ネパールでいう「山」はヒマラヤの山を指します。そういう意味では報告の表題も「山間地域」よりも「中山間地」のほうがふさわしいかもしれません。おおむね人の集落は点在しているものの、都市部からのアクセスは少し時間がかかるような地域を想像してください。本日はそういった中山間地域の被災と支援についてお話ししたいと思います。

私自身はこの研究所に所属する以前の5年間、災害のN P Oで国内の被災地支援を行っておりました。ボランティアの一員として被災地に行ったり、たくさんいるボランティアをまとめる役割として働いたり、あるいはボランティア活動の中から学んだ教訓を生かして、将来起こる災害から人の命やくらしを守るために啓発活動を行ってきました。

今回、ネパールの被災地に入るに当たり、私の関心の先にあったのも、「地域の助け合いのような、地元の人たちが行う支援」でした。とかく発展途上国で災害が起こると、国連組織や国際N G Oがどのような支援をしたか、あるいは彼らが直面する問題の報道がたくさんされますが、こうした大規模な、かつ外部から入る支援ではなくて小さな支援活動が、どういう理由で、誰によって、どんなふうに行われているのかに 관심がありました。

今回訪問したのは、首都カトマンズから少し南西に下がったところにあるパルンという小さな町です。

ネパールの国土は東西が400~500キロ、南北は230キロと短いです。北側には8,000メートル級のヒマラヤ山脈がそびえていて、こちら

はネパール語でも「山」です。私が訪れた「丘」は標高2,000メートル程度です。

パルンの後は、ポカラというネパール第二の都市も訪ねました。ポカラは、今回の地震の震源であるゴルカにはカトマンズより近いですが、被害はほぼ受けませんでした。ただしポカラは観光都市なので、被災後、観光客が激減するという問題に直面しています。



今回の訪問地

調査日程

- 6月
- 17日大阪／発
- 18日カトマンズ
- 19日パルン／Faran Sochと打合せ
- 20日パルン／Faran Sochと小学校訪問
- 21日ポカラ／Damside Youth Clubと面会
- 22日カトマンズ／発

以上が日程です。この行程に沿って報告を進めます。まず、カトマンズからパルンに向かう道です。山腹に沿って小さい集落が張りついていて、標高のかなり高いところまで、小さな集落が点在しています。彼らは山腹のわずかな土地を開墾し畑にして、今なら大根、秋になるとジャガイモ、キャベツなどを作っています。農作物はカトマンズや、一部インドにも売って生計を立てています。また、集落でヤギを飼い、ヤギ肉を食べて生活しています。

この道中には、写真のように家が壊れている風景を何度も目にしました。正確には誰が配ったのかはわかりませんが、USAIDやUKというロゴのシートが配られていました。他には、かまぼこ型のトタン壁と天井を組み合わせて仮設住宅ができるキットが配られていました。この仮設で生活をしている人もいる一方、使わずにそのまま板が放置されている場面も目にしました。



カトマンズ→パルンの道中



山腹に沿って小さな集落が点在する



カトマンズ→パルンの道中の集落



支援物資のトタン製キット

なぜ私がこの調査をすることが可能になったかをお話ししなくてはなりません。今回同行したのは、ポカラ出身のスジャン・アディカリさんです。スジャンさんは現在大阪大学大学院の博士課程で文化人類学を学ばれていて、震災後、周囲の阪大の留学生たちと、kizuna Nepal（仮）という団体を立ち上げました。今回は、彼らの思いを支援として伝える目的も兼ねて行きました。

概要

調査目的

- ・ネパール国内の地域(①中山間地域・②被災地から離れた都市部)において、地元の人々が行った被災者支援の活動について話を聞く。
 - ・被災者支援の諸制度の運用状況について話を聞く
- 同行者
- ・スジャン・アディカリ氏(大阪大学大学院博士課程／文化人類学)(Kizuna Nepal(仮)、グローバル豊中)

本日は、パルンでの話題を一つ、ポカラでの話題を一つ提供します。

パルンは人口約5,000人の小都市です。近くにあるダマンという景勝地とともに古くから栄えていたそうです。今回、阪大の留学生グループにパルン出身の方が1人いまして、その方を通じて被害があると聞いていたため、訪れることにしました。

パルンにはFaran Soch (ファラン・ソック)という地元の若者有志による団体が震災前か

らありました。団体名の英訳はDifferent Thinking for Changeと言います。「変化のためのさまざまな考え」と言ったところでしょうか。ここが、様々な慈善活動をしていて、地震後にも活動を続けていたということでした。我々は、パルン到着後まず彼らに会いに行き、大阪から持参した文具の配布について打ち合わせをしました。

本日のトピック

- パルン
 - 地元若者グループ「ファラン・ソック」の支援活動
 - アクセス困難な小学校への外部支援
- ポカラ
 - 被災していない地域(都市部)の地元グループが行う支援活動

マクワンプール郡パルン市

- ネパール南部、人口約5,200人(1991年国勢調査)の町。
- ネパール人には近隣の景勝地であるダマン(Daman)とともに古くに栄えた商都市として知られている。
- 地元若者有志グループFaran Soch(Different Thinking for Change)を介した学用品の配布

その後、彼らの通常時の活動について聞きました。その一つがコミュニティラジオでして、彼らは地元のニュースを地域に伝える活動もしています。ファラン・ソックのメンバーは、カメラ屋さん、学校の先生——先生がいることで後々調査が充実してくるのですが——、市役所職員、他にも様々な職業の方がいて、おおむねみな30代くらいです。

震災後の支援について伺うと、特に貧しい被災家庭に対する金銭的な支援、コミュニティラジオのレポーターの活動に対する支援など、

独自の活動を行ってきたそうです。ただ、今後の被災者支援について尋ねたところ、Community Empowerment、農業支援などの言葉にとどまり、具体的な内容までが引き出せませんでした。

私にとっては、ネパールの、NGO関係者でもない一般市民からEmpowermentのような言葉を聞いたのが驚きでもありました。でも、こうした支援のいわゆる専門用語は、一般的の若い人にも既に浸透しているのだと痛感しました。

さて、先ほどの打ち合わせによって、二つの小学校で学用品を配ることが決まりました。文房具セットには、筆箱と、大阪でネパールの留学生たちなどの支援者が詰めた文房具が入っています。

ファラン・ソックのメンバーが関わるコミュニティラジオ局



物資を配布する小学校を検討



一つ目の小学校では、校舎に被害はありませんでした。ただ、通っている生徒の中には被災した子もいて、残った校舎の中で生活している家族がいました。

フラン・ソックのメンバーへのインタビュー

- これまでどのような活動をしたか？
- 貧しい被災家庭への金銭的支援。地元のレポーター活動への支援など。
- 今後どのような支援をしたいか。
- Community Empowermentをしたい。例えば、ヤギ銀行による農業支援など…。

学用品を配布した小学校(1)



二つ目は、フラン・ソックのメンバーが校長先生を務めている小学校です。こちらも校舎は残っていますが、同様に通っている生徒の中には家が壊れた子もいるので、こうして使っていない教室が9人の子供の仮設生活のために使われていました。この子達の親は山の上の壊れた家に住んだまま、寝る場所のない子どもは学校で暮らし、親が食べ物を持ってきているということでした。

学用品を配布した小学校(1)



学用品を配布した小学校(2)



学用品を配布した小学校(2)



学用品を配布した小学校(1)



これは被害認定が済んだ印で、子どもが暮らしている校舎には「緑」、左側の写真は学校の事務室ですが、「赤」の判定でした。本当は危ないのでですが、そのまま使われていました。

学用品を配布した小学校(2)



町から徒歩で1時間の小学校



さて、2箇所の小学校で配布が終わり、ファン・ソックのメンバーと休憩をしていました。夕方の4時半ごろですが、ある女性の校長先生が我々の休憩していた写真屋の前を通りました。メンバーにも校長先生がいますが、校長先生同士は地域の会合等で互いに顔見知りだそうです。それでお話を伺うと、その女性の校長先生の小学校は見る影もなく壊れてしまっている、ということでした。我々が午前中に物を配布した小学校は、まだ校舎が残っていたので驚きました。校長先生のお誘いで校舎を見に行くことになりました。



この写真のような山道の上に小学校があり、生徒はここに2、3時間かけて毎日通っています。もちろん車も入れませんし、バイクでも行くことができません。

町から徒歩で1時間の小学校



1時間ほど歩いて小学校に到着しました。見る影もないとはそのとおりで、後ろ側にある教室は全て崩れており、手前の、かつて学校の事務所だった場所には赤の認定が貼られていました。この写真では、手前の赤いTシャツの男性がスジョンさん、奥にいるのが女性の校長先生です。

町から徒歩で1時間の小学校



校舎に近づいてみると、もろくて芯材のないコンクリートがぼろぼろと崩れ落ちている状

態で、校長先生も、もしこれが休日でなかつたら生徒もろとも私も死んでいたに違いない」というお話をしてくださいました。



その後、夕暮れ時でしたが、校長先生のほかに2名、保護者代表の生徒の父親が来てくれました。後ろに見えているのは、今子供たちが学んでいる仮設の校舎です。



聞いたお話をまとめると、まず、全く物がないということ。スポーツ用品や子供たちの文

房具など何もないということでした。午前中の文房具がもう少し余っていればと少し悔やみましたが、どうにもなりません。そして、仮設の校舎のまま雨季を迎えることがとても心配だということでした。学校の再建にあたっては、今よりもアクセスが良い場所に建てたい、また今の校舎の場所が昔水たまりのあった場所だそうで、それも不安だということでした。彼らは今、こうした話し合いを定期的に持っている段階だということでした。それから、「震災を期に、集落ごと、あるいは学校をなくしてしまうような事態にはならないか」という質問しました。答えは「それはない」というもので、なぜなら今も子どもは通学に2、3時間かけていて、今の学校がなくなればさらにアクセスが悪くなるから、と校長先生からお話をいただきました。

校長先生へのインタビュー

- 困っていることは？
- 校舎が全壊して何もない。子どもたちの文房具もない。
- 学校でスポーツするための用品なども失った。
- 今後学校をどうするのか？
- 保護者会と話し合いをしている。校舎はできるだけ道のあるところに移動したい。今の場所では物を運ぶのが困難。また校舎が建っている場所はかつて水たまりだったところを埋めた場所なので不安。
- この学校がなくなることはあるか？
- 校長先生「そういうことはない。学校は村の中心部にあるので、学校がなくなったら子どもたちがさらに2~3時間歩かなければならぬ。学校の存在がなくなることはない。」

さて、ポカラの話に移ります。

ポカラ

- ネパール第2の都市で、有数の観光地。人口約30万人。
- 地震後観光客は激減。カトマンズと違って支援関係者もいない。
- 地元の「クラブ」: Damside Clubと面会
- 報道で「被害がほとんどない」と言われている地域でも、山の奥にいくと、シビアな被害(小学校の倒壊)がある。

この写真はポカラの全景です。秋には雲の後

ろにヒマラヤの山々が見えるはずですが、今はすっかり見えなくなってしまいました。下に広がっているのがポカラで、湖を囲む風光明媚なところです。



ポカラではDamside Youth Club (DYC) という団体の方々に会いました。Damsideはポカラの地域の名前です。DYCは、地域の振興活動やスポーツ活動を行っていて、サッカーカラーブからはかつてネパールの代表選手も出たことがあるそうです。

DYCでは、我々を迎えて会を開いてくださいました。ポカラに近いカスキ郡でも、パルン周辺の集落と同じように被災しているところもあり、支援物資を届けたりもしていたようです。会長さんにこれまでの活動を伺いました。



一つ目は、日本でいうところの「広域避難」に当たるかもしれません、被災地からポカラの病院に避難してきた人を支援したそ

す。遠く離れて避難した家族に対する生活支援を、地域の病院や他のクラブと組んで行いました。支援活動に対する資金は、この地域出身で海外に住む人が結成している「支部」から提供されています。DYCの場合、イギリスや東京に在住するDamside出身者が「支部」を結成していて、そこから金銭援助を得たとのことでした。

次に、被災者支援にあたり病院など地域の他の団体とどのように連携したのかという質問を投げかけました。答えは、「ポカラにいる人は大体みんな知っているから、声かけたら協力してもらえる」という至極当たり前の答えでした。日本でもそうですが、外部支援者はつてを探すのは大変ですが、地域の助け合いは、知り合いを通じて行っていくものです。そこはネパールも変わりません。

Damside Youth Clubの活動



Damside Youth Club会長へのインタビュー

- ・「被災地からポカラの病院に避難してきた被災者の支援をした。病院やほかのクラブの人と協力した。」
- ・「海外にいるクラブメンバー（イギリス・日本）からの金銭援助があった。」
- ・「ポカラにいる人は、たいてい知り合いだから声をかけたら協力してもらえる」

スライドは以上です。帰国して間もなく、詳細の考察はできていませんが、これまでお示

した内容から少し感ずるところを申し述べます。一つは小学校です。アクセス困難な集落や学校に対する外部からの支援は一通り行われています。先ほどの山上の小学校にも、セーブ・ザ・チルドレンからブルーシートが3枚届いたということでした。ですから支援は皆無ではありませんが、かといってその後も継続的に入る支援者はどこもないということでした。特に、学校再建の過程まで外部者がともに歩むかというと、そのような存在も見えませんでした。ただし今後はわかりません。

もう一点は、パルンにおいてファラン・ソックの方々には「学用品はできるだけ困難な立場にある子ども達に届けたい」と伝えていましたが、なかなかその希望はかないませんでした。あの、女性の校長先生がたまたま我々の脇を通ったため、全てを失った学校に行き着くことができました。恐らく様々な地元の事情もあるものと思われます。地元の方に直接届けたいとお願いをしても、より困難な人に適切につながるとは限らないことに改めて気づかされました。海外支援に携わる方にとっては基本的な話なのかもしれません、個人的には強く実感した点です。

最後に、目立たない被災地の存在です。日本に聞こえてくる被災地の情報は非常に限られていて、カトマンズやラリトプルなどの大都市、震源に近いゴルカやシンドバルチョークの情報に限られています。しかし、かなり離れたポカラの周辺やパルンの周辺にも、家を失った人は国の広範囲に点在していて、そういった地域への支援は手薄になっているのは間違いないありません。

我々が今回お話を聞いたのは、こうした目立たない被災地を支援している地元の団体の方々でした。もし今後、継続して日本から何かできるとしたら、このような目立たない被災地を支援する地元グループとの関わりをとつかかりにするという手段もあるのではない

でしょうか。

考察

- アクセス困難な集落、学校への外部支援は確かに手薄いが、地元の事情もある（地元団体にお願いしても、より困ったところに適切につながるとは限らない）
- 「目立たない被災地」（カトマンズやラリトプルなどの大都市以外、もしくは震源のゴルカ郡付近以外）にも被災した集落は点在しており、周辺地域の地元グループが支援に入っているケースもある。